

# 「クローン病の完治の記録」 リチャードケイ 31歳

2013年11月4日

## 1. はじめに

私は、15年間患ったクローン病が完治しました。非常に幸運なことだと思っています。と言いますのも、松本先生がおっしゃるように人体というものはとても神秘的で、全てが理論通りにいくわけではないからです。

## 2. クローン病発症から松本医院受診まで

1995年、私はクローン病を発症した。

14歳のときだった。

クローン病が見つかるきっかけは、肛門に膿が溜まる肛門周囲膿瘍という症状で肛門科クリニックを受診したことによるが、クローン病の治療には大学病院に通院することになった。

治療は薬物療法と栄養療法の併用が選択された。

CD治療薬としては、5-ASA製剤のサラゾピリン（1996年、ペンタサが発売されてからはそちらに切り替えた）が処方された。（後述するが、当時はあまり飲んでいなかった）

栄養療法については、経腸栄養剤のエンシュアリキッドを750 kcal/day (1kcal/ml) を経口で摂取し、食事による1日の脂質を20g以下に制限し始めた。

（1999年よりエンシュアリキッドを止め、エレンタール1200 kcal/day (1kcal/ml) を開始した。）

私は、自分が難病であるクローン病だと言われたとき、ショックというよりも恐怖の方が優っていた。

それは病気自体に対する恐怖ではなく、外科手術に対する恐怖だった。

子供心に、自分の体にメスを入れなければならない手術というものに対して、言いようのない恐怖心を感じていた。

（当時、自宅に「鬼手佛心」と書かれた掛け軸が掛けられていたが、14歳の少年にはその意味するところなど分かるはずも無かった。）

しかし、当時母親に言われた。

「主治医の先生は、クローン病は年を取って免疫が落ち着けばやがて症状も無くなると言っている。大人になれば治るから、心配することはないのよ。」

また、父親は

「現代の医学においては治療法が確立されていない、いわゆる難病というものは存在する。しかし、治らないことが証明されている病気はただの1つもない。だから、クローン病に対して悲観的になる必要性は全くない」という極めてリアリスティックというか、事実を即した考え方をしていたので、私もいつのまにか病気に対してあまり悲観的に考えなくなった。

また、治療方針については、医師をしていた祖父の指示により、なるべく薬は飲まず食事制限だけで寛解状態を保つようにした。

しかし、そのためには厳しい食事制限をしなければならず、10代の自分にはとても辛いものであったが、クローン病が治るまでの辛抱だといつも自分に言い聞かせていた。

「いずれ治るから、心配するな。だからストレスは溜めるな。」  
という祖父の言葉を常に思い出していた。

(また、母親のかつての上司だった先生や祖父の知合いの先生方を通じ、クローン病は年を取ればいずれ症状も落ち着き、ほぼ完治したような状態になることもままあるので、何も心配は要らないと言われていた。多くの先生方の温かいお言葉に対し今は大変感謝している。もちろん、完治するにはそれまでの生き方を改めることが必要であるが、それに関してはこの文章の最後をご覧ください)

### 3. 松本医院を受診する

2011年4月、インターネットの検索により松本医院を知る。

検索したワードは、  
「クローン病、完治」

検索結果は数万件あったが、松本医院でクローン病を完治された患者さんの手記のページに幸運にも行き着いた。

全ては松本医院の患者さんたち（特に小西竜二さん）が自分を導いてくれたものだと今は感じている。

同年、5月14日

16年間果たせなかったクローン病完治の目標を達成するため  
松本医院を受診した。

先生には以下の症状を話した。

- ・8～11回/dayの下痢がある
- ・腹痛は無い
- ・下痢で食事が出来ない。エレンタールも下痢のため飲めない。

これに対し、以下の言葉を頂戴した。

「あんたのクローン病、わしが治したる」

「しかし、ほんまに病気を治すんはわしやない。あんたの免疫や。そのために鍼灸治療は  
頻繁に受けなさい」

「仕事は諦めなさい。クローン病にストレスが一番悪い。残業なんかしたらだめや」

「松本医院のHP、患者さんの手記をよう読んどきや」

「よっしゃ、下痢に効く漢方出したる」

という言葉だった。

以下、処方して頂いた生薬

①断痢湯（下痢を止める）

②葛根黄連黄ごん湯（胃、腸管の炎症、潰瘍を改善し、出血を止める）

これらの生薬を40分かけて煎じ、この日から毎日飲むことになった。

#### 4. クローン病の完治の記録

##### ①2011年5月14日以前までの概況

1995年にクローン病を発症してから松本医院を受診する2011年に至るまでに、炎症反応を示すCRP数値(mg/dl)は、0.3(正常値)～4.0の範囲内にあり発症後10年間は正常値(0.3以下)になったことは無かった。

小腸は狭窄切除のため外科手術を行っていた。(残存小腸2m強)

CD治療薬については、5-ASA製剤のサラゾピリン、ペンタサ、および免疫調節薬のアザニン(アザニンは2009年の1年間のみ)を服薬していた。1995年～2007年まではなるべく服薬は避けていたが、2008年～2010年にかけては、時には上限まで服薬していた。

2011年1月以降は一切の服薬を中止していた。

1995年～2011年までは下痢をすることはほぼ無かったが、2011年の外科手術以降下痢を10回以上/day するようになった。

日常的な発熱、腹痛、下血等は無かった。特定の食べ物（いわゆるクローン病禁忌食といわれるもの）を食べた時に、炎症・腹痛を繰り返していた。

②2011年5月14日、松本医院受診以降

I 断痢湯

II 葛根黄連黄ごん湯

を毎日飲み始めた。

頻回の下痢は減少しなかったが、上記I IIを辛抱強く飲み続け、半年ほど経つ頃から食事制限を徐々に緩めていった。

2011年末頃からは、クローン病発症後には一度も食べていなかった食べ物も口にできるようになった。

しかし、いくら食べても何を食べても腹痛は全く起こらなかった。

かつては、揚げ物やジャンクフードを食べると必ず炎症・腹痛が起き体調も悪くなっていたが、そのようなことは一切なくなった。

西洋薬から漢方薬への切替時に伴う激しいクローン病の症状は、私には無かった。ソフトランディングといったところだろうか。極めて幸運であったと思う。

そして2012年夏頃には頻回の下痢も無くなった。

2013年11月現在、クローン病は完治し、服薬はなく食事制限もない。また、特定疾患の申請もしていない。

## 5. 自分の未来を自分の手で変えようとしている方々へ

(以下の内容は、全て他の患者さんが繰り返し書いていることで目新しい内容はありません。いわば、手記を書いた患者たちによるバトンリレーのようなものです)

私には全ての患者さんに伝えたいことがあります。

それは、何故我々は病気になるのか、そして病気とは我々にとって一体何なのか、という問いに対する答の“ヒント”となるものです。

唐突な話で恐縮ですが、

我々人間は、この地球上で 35 億年間生き抜いてきました。

この間に人間は、素晴らしい免疫システムを築いてきました。

人間はこの完璧な免疫システムのお陰で、体内に侵入してきた外敵（異物）から自らの身を守ることが出来ました。

そのことから考えると、我々が病気に罹るのは人間の体が不完全（免疫システムの重大な欠陥）であるからではなく、我々の生き方に問題があるからだろうと思われま

す。ただ、生き方に問題があると言いましても、それは一人よがりな生き方をして他人のことを傷つけるようなことをしたとかそういったことではありません。

寧ろ事實はまったく逆で、病気になってしまう人というのは、他人のことを考え過ぎ毎日を極度に頑張り過ぎることで、自分の体・精神を傷つけてしまった人であろうと思います。つまり、我々の毎日の生活に無理が祟って、その無理が我々の免疫システムに誤動作を生じさせたのである、ということです。

「頑張り過ぎた人が、ある日突然病気になる。」

それは、我々の素晴らしい免疫システムが炎症という戦いを始めた合図です。

もちろん、炎症自体が悪者な訳ではありません。

“発赤、腫脹、疼痛、発熱”

何れも、大切な生体反応です。

これら自体を無理に抑え込もうとすることがいかに不毛であるかは、多くの患者さんの手記にある通りです。

病気というものは、我々の“生き方(無理をした生活)”に異常を知らせるものではないでしょうか。

この、病気というものに罹った時こそが我々に与えられたチャンスである、と思います。

“過去の生き方を変える”チャンスです。

この手記を読んで頂いている方々ならば、これから具体的にどうすれば良いのかお分かりのことと思います。

行動に移すべき時は、この拙い手記をお読みになった直後です。

実は私は、もしかしたら自分のクローン病は一生治らないかもしれないと思ったこともありました。

しかし、意外にも、夢は簡単に叶いました。

今思い返してみますと、クローン病と格闘していた日々を懐かしく感じます。ことほどさように、困難というものはそんなものかもしれません。

何事も挑戦することは、とてもやりがいがあることだと思います。

もしかすると、クローン病が完治した現在よりも、クローン病が完治すると確信して生薬を煎じて飲んでいたころの方が精神的に充足していたかもしれません。

そして、16年間は苦しい日々でもありましたが  
ただ、一つだけ分かっていたことがあります。  
それは“どう生きるかは自分次第”だということです。

松本先生、松本医院の関係者様、鍼灸の先生、看護婦さん  
皆様には大変深く感謝しております。  
今の自分があるのは皆様のお陰です。

さいごに  
皆様、読んで頂きまして有難うございました。  
どうか自分の免疫の力を信じて下さい。

そして肩の力を抜いて、  
自分を信じてください。